

Interdialectal Communication –A Collection of Conversations with So-Called “Unrecognizable Dialects”–

Yumiko Yoshimura

Abstract

In the Meiji era Japan shaped its form as a modern state, and in the aspect of a language established standard Japanese and disseminated it through school education and newspapers. In the Taisho Period broadcasting on radio began and after World War II in the Showa period it progressed to TV broadcasting, which accelerated standardization and seemed to extinguish dialects. However, Sato and Yoneda ed. (1999) revealed that only 11% of people always use common Japanese, 15% dialects only, and 74% dialects with family and local people while using standard language with unknown people. In other words, Japanese people are living a bilingual life switching between dialects and standard Japanese according to the situation. In fact, they use so-called “unrecognizable dialects” even when they try to speak in lingua franca. This study aims to examine how “unrecognizable dialects” cause misunderstanding when they are used with people who do not commonly share them.

Analyzing the conversations reported by fifty-eight university students, we found seven patterns in the listeners’ reactions to the unrecognizable dialects as follows.

- 1) They did not understand them, and could not react to them.
- 2) They did not understand them, but judging from the situation, happened to react to them properly.
- 3) They did not understand them, and asked the third party about their meanings later.
- 4) They did not understand them, and asked the speaker about their meanings directly.
- 5) They heard a mistake.
- 6) They misunderstood, confirmed and requested an explanation of them.
- 7) They misunderstood them, reacted improperly, and were scolded.

This study should be the foundation of building better communication amongst people living with different dialects.

異方言話者とのコミュニケーション

—いわゆる「気づかない方言」の出現する会話集—

吉村弓子

1. はじめに

明治時代になって近代国家としての形態を整えた日本は、言語においても共通語を制定し、学校教育や新聞などを通じて共通語を普及させることに努めた。大正時代にラジオ放送、昭和の戦後にテレビ放送が始まってから、共通語化は加速度的に進み、方言は消滅するかに見えた。しかし、佐藤・米田編（1999）では、日常的に共通語を使う人はわずか11%にとどまり、方言のみ使う人が15%、知らない人とは共通語で話すことを心がけるものの家族や地元の人とは方言を使う人が74%であることが明らかになった。つまり、大多数の人は、方言と共通語を使い分けるバイリンガル生活を送っているのである。

また、現代社会において、生まれ育った地方で一生を過ごす人は少なくなってきており、親の仕事の都合や本人の進学、就職、転勤、結婚等で居を移すことは珍しくない。転居先では故郷の方言とは異なる方言が使われている場合もあり、コミュニケーションに支障が生じ得る。一方、生まれた地方から足を踏み出さない人も、転校生や転入者とコミュニケーションを行うことは日常生活レベルでも避けがたく、自分の日本語が通じない、という経験をすることがあると思われる。コンビニやスーパーの店員、宅配便の配達員が転入者という可能性は、大いにあるからである。サービス業に従事する場合は不特定多数の顧客に接するため、方言の違いによる摩擦を経験する可能性はさらに高くなるに相違ない。

もっと言えば、場面や相手に配慮して方言を使わないようにしている場面ですら、話し手本人が方言とは思っていない言葉が実は方言であり、異方言話者には通じないこともある。篠崎（2017）は、そのような、いわゆる「気づかない方言」約200語について、用いられる地域、意味、用法、語源を解説した小辞典である。本稿は、その用法をさらに押し進め、気づかない方言が異方言話者との会話で用いられた場合にどのように誤解を招くのかに焦点をあて、会話例を収集・分類した。

2. 会話例の収集方法

2. 1. 調査協力者

豊橋技術科学大学 2018 年度前期開講科目「日本の言語と文化」^{*1} の履修者 68 名で、内訳は次の通りである。

学年：工学部 3 年次 27 名、大学院工学研究科博士前期課程 1 年次 41 名

性別：男 59 名、女 8 名、その他 1 名^{*2}

年齢：20 代前半 68 名

国籍：日本 64 名、モンゴル 4 名

国内出身地：北海道 4 名、岩手 1 名、山形 1 名、栃木 1 名、東京 2 名、神奈川 1 名、新潟 1 名、富山 1 名、石川 3 名、福井 1 名、岐阜 3 名、静岡 4 名、愛知 8 名、三重 2 名、滋賀 2 名、京都 1 名、兵庫 5 名、奈良 5 名、鳥取 2 名、島根 1 名、岡山 2 名、広島 5 名、徳島 2 名、愛媛 1 名、高知 2 名、福岡 2 名、鹿児島 1 名

大学の所在地が愛知県であるため県内出身者が最も多いが、北海道から鹿児島まで広く全国の出身者が受講していたことがわかる。当該科目は教室の収容人数等により受講者数を制限しているが、Web による予備登録者の人数が制限を超える場合にコンピュータがランダムに抽選を行っており、担当教師が任意に受講生を選抜することはできない。本学学生の約 8 割が全国の高等専門学校卒業生の 3 年次編入であることから、受講者の出身地が全国をカバーしているのは例年のことである。

2. 2. 調査方法

日時 2018 年 6 月 28 日～7 月 12 日

方法 学習管理システム Moodle を利用して、宿題として行った^{*3}。6 月 28 日の授業時に次の説明と回答例をスクリーンに投影し、口頭説明を行った。

*1 豊橋技術科学大学は工学部だけの単科大学で、全ての学生が工学を専攻している。当該科目は、学部および大学院において、いわゆる教養の選択必修科目として開講しており、シラバスは以下で公開している。

<https://kyomu.office.tut.ac.jp/portal/public/syllabus/>

*2 女性語・男性語についての宿題もあるため、性別について尋ねた。選択肢は LBGT 等に配慮して「男、女、その他」とした。

*3 教師が作成した問題に対して学習者が答える機能は、Moodle ではバージョンによって名称が異なり、「アンケート」「フィードバック」と呼ばれている。

従来のように紙に回答を書いて提出させる方法と比べた利点は 2 つある。1) 提出物の散逸を防ぎ、提出日時が正確に把握できる。2) 教師の設定によって、学習者が回答を送信した後に限って他の学習者の回答（氏名は表示・非表示の選択可）が閲覧できる。

特に 2) によって学習者相互で学び合うことが可能となり、提出したら終わりになりがちなレポートを有効に活用することができる。

<説明>

日本語のバラエティ（性別、年齢、職業、学校、専門、方言）の違いによって意味が通じなかったり誤解を招いた場面（2人以上による会話）を取り上げ、その場面の状況、スクリプト、分析を回答例を参考にして書いてください。

- ・ 実例（実際に体験した例）が望ましいが、思い当たらない場合は作例（創作した例）で構わない。
- ・ 発話者のバラエティの違いを明確に示すこと。
たとえば、性別の場合：A（男） B（女）
年齢の場合：A（70歳代） B（20歳代）
方言の場合、方言名がわかれば方言名を：A（津軽弁） B（博多弁）、方言名の不明な場合は出身地域を：A（兵庫県） B（豊橋市）

回答例

<状況>

駅前で研究室の飲み会をしていて、夜遅くなってしまった。Aは終バスで帰るつもりだった。Bはお酒は飲まないので車で来ていた。AとBは同じ学年の割と親しい男子学生である。

<スクリプト>

B（高知）：どうやって帰る？

A（東京）：バス。

B：バス停から近かった？

A：30分ぐらい歩くかな。

B：積んでいこうか？

A：え？ 俺、荷物かよ。

B：なんで？

A：人は「乗せる」だろ。

B：高知では「積む」って言うよ。

A：それ本当？

<分析>

共通語では人は「乗せる」、物は「積む」と区別して使うが、高知では人も物も「積む」と言う。高知出身のB君は「(A君を) 積んでいこうか」と親切に申し出たのだが、Aは東京出身で高知での言い方を知らなかったため「積む=物」と解釈し、「俺、荷物かよ」と少し怒って答えた。Bがその発言を理解できなかったので、Aは「人は「乗せる」だろ」と補足発言

をした。それに対してBが反論し、Aはその内容に驚き、真偽を確認した。

2. 3. 授業内容との関連

この授業は教科書『日本語のバラエティ』に沿って進めており、以下の25ケースを全て扱った。

1. 女のことば・男のことば、2. 幼児のことば・育児のことば、3. 専門のことば・仲間のことば、4. 若者ことば・キャンパスことば、5. ことばのデフォルメ、6. 方言のイメージ、7. 東の方言・西の方言、8. 気づかれにくい方言、9. 新しい方言・古い方言、10. 方言と共通語、11. ことばの切りかえ、12. 敬うことば・へりくだることば、13. 上品なことば・下品なことば、14. 忌避することば・慶用のことば、15. サービスのことば、16. 喜怒哀楽のことば、17. 話しことばと書きことば（音声編）、18. 話しことばと書きことば（文字編）、19. 論文・レポートのことば、20. メール・ネットのことば、21. マンガ・雑誌のことば、22. ゆれていることば、23. 化石化したことば、24. 非母語話者のことば、25. やさしい日本語

調査実施時点では授業はケース17まで進んでおり、方言に関するケース6～10までの学習は終了していた。宿題の回答例としてあげた「積む」の意味は「ケース8. 気づかれにくい方言」として教科書でも取り上げられており、授業でも言及した。回答例の「状況」と「スクリプト」は、調査協力者たちが遭遇しそうな会話として筆者が作成した。

3. 調査結果

調査協力者が日本語のバラエティのうち選択したものは以下の通りで、方言が最も多かった。

性別1名、年齢5名、職業1名、学校3名、専門0名、方言58名

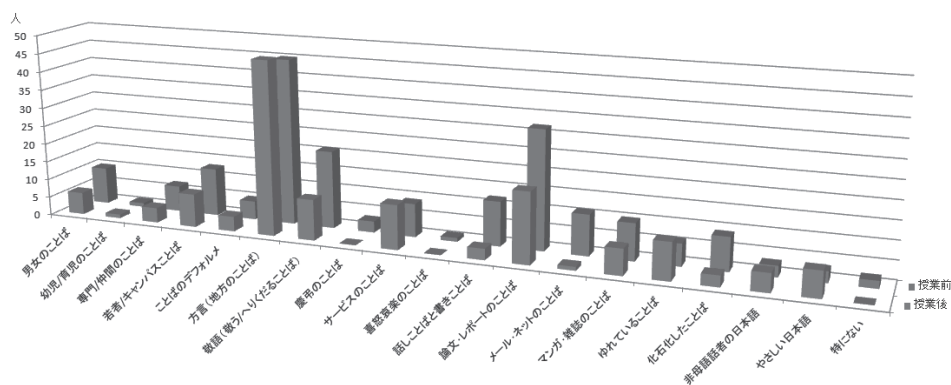


図1 受講者の興味 授業前と授業後

前節で示したように、宿題の説明をする際にあげた例が方言であったことが回答を誘導した可能性もある。しかし、図 1 に示すように、2 回目の授業の宿題で教科書の内容のうち最も興味のあるものを 3 つまで選ばせたところ「方言（地方のことば）」が最も多く、全授業を終えた時点で同じ質問を行ったその回答もやはり「方言（地方のことば）」が最多であったことから、受講者の興味が方言にあったことが原因であると考えられる。

本稿は、この 58 名から得られた回答を分類する。

4. 会話例の分類

まず、方言を聞いた人の反応によって、1) 理解できなかった、2) 聞き間違いをした、3) 誤解をした、の 3 分類にした。

「1) 理解できなかった」はさらに、1. 1.) 呆然とした、1. 2) 状況から判断したら偶然正解だった、1. 3) 後で第 3 者に聞いた、1. 4) 直接話者に聞いた、の 4 つに分けた。「3) 誤解をした」は、3. 1) 確認して説明を受けた、3. 2) 誤解のまま行動し叱責を受けた、の 2 つに分類した。

なお、会話例は、課題の指示通りでないもの、意味が不明なもの、重複・類似するものを取り除いた 26 例について、紙幅の都合から<状況>と<スクリプト>のみ示した。<分析>を省略する代わりに、「方言（地域）→共通語での表現」とまとめ、スクリプト中の気づかない方言に下線を、聞き間違いや誤解に破線を付した。なお、スクリプト中の地域は調査協力者の記述のままであるが、それよりも広域で使われる方言もあるため、まとめの地域は日本方言大辞典（以下「大」）から筆者が転載した。辞典に「～市 / 郡」とある場合は、都道府県名のみ記載した。同辞典に日本方言地図が掲げている場合は、その地域も記述した。同辞典の掲載が無く、現代日本方言大辞典（以下「現」）に記載がある場合は、その都道府県名を記した。どちらの辞典にも載っておらず篠崎（前掲書、以下「小」）に載っている場合は、その地域を示した。

もちろん、辞典に記載がないのは調査や文献でデータが得られなかったためで、実際には使用されている場合もある。また、方言が伝播している場合もあり、記載がないからといって使われていないという意味ではない。逆に、記載があっても一般的ではない場合も有り得る。

4. 1. 理解できなかった

4. 1. 1. 呆然→叱責・文句

会話 1 実例

<状況>

学校の昼休み

<スクリプト>

A（岐阜）：昼休み終わったら掃除の時間だからみんな机つってね～

B（埼玉）：？

A：Bさん、なんで協力してくれないの？
B：??
A：掃除あるから机つってって言ったよね？
B：???

<方言>

机をつる（現：岐阜、愛知、三重）→机を担ぐ、引きずらずに運ぶ

会話2 作例

<状況>

AがBの引っ越しの作業を手伝っている。

<スクリプト>

A（富山）：その棚かたがとるよ。

B（愛知）：なに言ってるの？

A：棚がかたがとる。

ガシャーン。

B：棚が倒れたじゃないか。

A：富山では「傾いている」ってことを「かたがる」っていうんだよ。

B：わからないから、標準語で話して！

<方言>

かたがる（大：秋田、山形、新潟、富山、石川、静岡、岐阜、島根）→傾く

4. 1. 2. 状況から判断→正解

会話3 実例

<状況>

Aはコンビニでアルバイトをしている留学生。Bはコンビニのお客で70代の男性。AとBは初対面。Bが店に入ってきて直接レジに向かい、持っていたライターをAに渡した。

<スクリプト>

B（関西）：ほっておいて！

A（モンゴル）：はい？

B：ほっておいて！！

A：（ライターをカウンターの上に置いて、カウンターから一步離れた。）

B：ほっておいてって言うてるやんか！

A：（なんとなくライターをゴミ箱に捨てた。）

B：（名札を見て）ああ、外国人だったんだ。ごめんよ。

<方言>

ほる、ほうる（大：大阪、香川、徳島）→捨てる

4. 1. 3. 後で第三者に聞く→説明→理解

会話4 実例

<状況>

バイト先で、Aが早退するとBに告げた。

<スクリプト>

A（愛知県東部）：お疲れ様です。

B（広島）：お疲れ様です。

A：悪いけど私えらいから今日は帰るね。

B：（ん？）

A：ではお疲れ様です。

B：お、お疲れ様です。（何言ってるんだこの人？）

（後で同僚の豊橋出身者に「えらい」の意味を尋ね、教えてもらった。）

<方言>

えらい（大：岩手、石川、福井、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、島根、山口、徳島、香川、愛媛、宮崎）→つらい、苦しい

4. 1. 4. 質問→説明→理解

会話5 実例

<状況>

大学の授業開始前。

<スクリプト>

A（豊橋）：教室の裏の方、座ろう。

B（三重）：？ 裏？

A：ん？ああ、後ろのほう！

B：なるほどね。

<方言>

裏（現：鹿児島）*4 →後ろ

会話6 実例

<状況>

Bがアイドルのライブへ向かう準備をしており、Aがその手伝いをしている。

2人は同じ学年の仲のいい男子学生である。

<スクリプト>

A（福岡）：どのバッグでライブ行くの？

B（島根）：うーん、やっぱり一番大きいこのバッグ（キャリーバッグ）かなあ…。

A：ふーん。でもそれだけじゃなくて、やっぱりからう系のやつがあったほうが便利じゃない？

B：え？なん…なんて？

A：え？だから、からう系のバッグがあったら便利だよって。

B：ん？から…ん？

A：…？？？

ああ！ごめんごめん！「からう」じゃなくて、えーっと、そうだ！「背負う」だわ！はあ～ごめん！！

<方言>

からう（大：山口、福岡、佐賀、長崎、熊本）→背負う

会話7 実例

<状況>

研究室で晩御飯をどうするかを話している、同学年の男子大学生。

<スクリプト>

B（静岡）：今日の晩飯どうする？

A（阿波弁）：〇〇のラーメン行こうかなと。

B：俺も一緒に行くわ。何時頃食べに行く？

A：今から行こうか。店は帰りしなにあるし、俺はそのままアパートに帰るわ。

B：帰りしなって？

A：「帰りしな」ってもしかして方言？

*4 辞書に記載はないが、愛知県豊橋市で「裏（後ろ）」が使われることが数多くの学生から報告された。

B：多分そうだと思う。

A：そうなのか。「帰りしな」っていうのは「帰る途中」っていう意味で使ったんだよ。

B：そういう意味なのか。

<方言>

帰りしな（大：滋賀、兵庫、香川、愛媛）*5 →帰る途中

会話8 作例

<状況>

Aは筆ペンで宛名書きをしていた。

Bはその横で様子を見ていた。

<スクリプト>

A（新潟）：宛名ってこの書き方でいいんだっけ？

B（岡山）：うん、いいと思う。けど、ちょっと字が曲がって汚いね。

A：え、そう？どのあたりが？

B：「白」の字のうったての位置がおかしい気がする。

A：うったて？

B：うったて。

A：なにそれは。

B：え、最初のとめのところだけど。言わない？

A：言わない。初めて聞いた。

<方言>

うったて（大：徳島、香川）*6 →書道の起筆

4. 2. 聞き間違い（聞き間違い・質問→訂正・説明→理解）

会話9 実例

<状況>

Aが友達Bの家に初めて行った。

<スクリプト>

A（静岡県西部）：お邪魔しまーす。

*5 「帰りしな」は見出しに無かったため、「行きし」の記述を転載した。

*6 「起筆」ではなく、「最初。手始め」の意味で収録されている。

B (富山)：はいはい。
A：お一部屋けっこいなー。
B：なんか趣味の合うものでもあった？
A：ん？
B：.....。
A：あ、そうかこれ方言か。
B：なんて言った？
A：けっこいだね。
B：なんて意味？
A：綺麗って意味だね。

<方言>

けっこい (大：静岡、愛知、香川、愛媛) / 結構いい (聞き間違い) → きれい

会話 10 実例

<状況>

大学院生同士の会話。

<スクリプト>

A (愛媛)：なんだか忙しそうやね？
B (静岡)：そう。今日何時に帰れるかなあ.....。
A：(実験すること) よーけあるん？
B：ん？よ、容器ある？
A：え、よーけ、あるの？
B：どういうこと？
A：することがたくさんあるの？って聞いたかった。
B：「たくさん」のことか、それはわからん。
A：愛媛では「よーけ」って言うんよ。
B：今度からは理解するわ。(笑)

<方言>

よーけ (現：岐阜、愛知、三重、京都、兵庫、奈良、島根、岡山、徳島、香川、愛媛、山口) /
容器 (聞き間違い) → たくさん

会話 11 実例

<状況>

豊橋の中学校で地元の生徒と転校生が話で盛り上がっているところ。

<スクリプト>

B (転校生) : A ってさ～、C に似ているよな～。

A (豊橋) : え～？ あんなやつと一緒にしんでよ～。

B : え！

A : え？

<方言>

しんでよ (見出しなし) / 死んでよ (聞き間違い) → しないでよ

4. 3. 誤解

4. 3. 1. 誤解・質問→訂正・説明→理解

会話 12 実例

<状況>

オンラインゲームで知り合った2人は、通話をしながらゲームを数時間続けていた。

<スクリプト>

B (鳥取) : ずっとゲームしてると、えらくなってこん？

A (千葉) : えらくって？ 誰が？

B : 自分。

A : えらくならないよ。どういうこと？

B : 自分は頭と目が疲れてえらいわ。

A : もしかして気分が悪いって意味？

B : そう。

<方言>

えらい (大: 福井、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、鳥根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、宮崎) / 偉い → 疲れた

会話 13 作例

<状況>

2人は大学の同学年で親しい仲。

<スクリプト>

A (島根)：やっと課題終わった。

B (東京)：今から遊ぼう。

A：今日はたいぎで遊びたくない。

B：何か重要なことでもあるの？

A：？

B：たいぎって何？

A：島根では「面倒くさい」をたいぎって言うよ。

B：え？そうなの？

<方言>

たいぎ (大：広島、山口、香川、愛媛) / 大義 → おっくうだ。面倒だ。つらい。

会話 14 作例

<状況>

雪かきをしている。

<スクリプト>

A (北海道、東北、北関東地方出身)：雪まだ降るね。あー、こわいこわい。

B (上記以外の出身)：これ以上降ると物置壊れそうだね。

A：大丈夫だよ。水分含んでなくて軽いから。

B：え、今怖いって言ったじゃん？

A：えっと、この「こわい」は肉体的に疲れたってこと。

B：あー、大丈夫かい？それなら一旦休憩しよう。

<方言>

こわい (北海道、青森、岩手、秋田、宮城、山形、新潟、福島、茨城、栃木、群馬、山梨、長野、富山、石川、福井、静岡、和歌山、島根、広島、愛媛、大分、宮崎、熊本、鹿児島)
/ 怖い、恐い → 疲れた

会話 15 作例

<状況>

大学の同学年の割と親しい男子学生 2 人。休日にドライブした帰り道。

<スクリプト>

A (青森)：家の近くまで送るよ。

B (東京)：もう家の近くだね。

A：じゃあここらへんで落ちる？

B：冗談でしょ。

A：なんで？

B：落ちるじゃなくて降ろすでしょ。

A：青森では「落ちる」って言うよ。

B：そうなんだ、知らなかった。

<方言>

落ちる (大：青森、岩手、秋田、山形、宮城、福島、新潟、千葉、) / 落ちる → 降りる

会話 16 作例

<状況>

仲の良い2人。BはAの家の鍵を持っており、Aの家で遊んだ後、一緒に外出するところ。

<スクリプト>

B (兵庫)：おじゃましました。

A (愛知)：家の鍵かっといて。

B：え、鍵買うん？ どういうこと？

A：鍵かうって、鍵をするっていうこと。

B：そうなんや。わかった。

<方言>

鍵をかう (見出しなし) / 鍵を買う → 鍵をかける

会話 17 作例

<状況>

Bが先輩Aに実験方法を教わっているところ。

<スクリプト>

B (東京)：この溶液どれに入ればいいですか？

A (奈良)：そこの、さらのヤツ使って。

B：皿？ この平たいヤツでいいですか？

A：いや、それじゃなくて。

B：皿のヤツじゃないんですか？

A：ああ、西の方では新品のものを「さら」って言うんだよね。そこの新品のビーカー使って。

<方言>

さら（大：新潟、富山、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、奈良、和歌山、京都、大阪、兵庫、鳥取、島根、徳島、香川、愛媛、高知）／皿 → 新品

会話 18 実例

<状況>

バイトの締め作業をしている。

<スクリプト>

A（豊橋）：掃除機がけとトイレ掃除終わったよ。まだ、何かすることある？

B（鹿児島）：とりあえず、掃除機なおして。

A：えっ、掃除機壊れてた？

B：壊れてないよ。なんで？

A：なおすって言ったよね？

B：片付けることをなおすって言わない？

A：言わないよ。直してって言ったからびっくりしたじゃん。

B：直すって、鹿児島弁だったのね。

<方言>

なおす（大：石川、福井、滋賀、京都、三重、奈良、大阪、兵庫、広島、山口、香川、徳島、愛媛、高知、福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄）／修理する → しまう、片付ける

会話 19 実例

<状況>

陸上競技の大会で出場種目を控えた友人Bのウォーミングアップ中、Aが邪魔を繰り返した時。

<スクリプト>

A（長崎）：（友人が走っている前を横切ったりする。）

B（広島）：おい、ワレ、たいがいとせんとぶちまわすぞ！！

A：なんて？なんで自分に向かって言いよん？（笑）*7

B：は？

A：いや、ワレって自分やん？

B：違うじゃろーが、ワレはお前のことや！

<方言>

われ（大：岩手、山形、福島、茨城、栃木、千葉、東京、神奈川、新潟、石川、福井、山梨、長野、岐阜、愛知、三重、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知、福岡、長崎、大分）／自分 →お前

会話 20 実例

<状況>

<スクリプト>

B（東京）：どこ食べに行く？

A（兵庫）：自分の好きなところ行こっか。

B：おっけー。

A：んで、どこいく？

B：ん？Aの好きなところに行くんじゃないの？

A：ああ、ごめん。「自分」は「君」の意味で使ったんだ。

B：あ、そうなんだ？それじゃあ……。

<方言>

自分（大：千葉、新潟、三重、大阪、大分）／自分 →君

会話 21 実例

<状況>

友達と明日の予定について LINE で連絡している。

<スクリプト>

A（沖縄）：明日来れる？

B（兵庫県）：行けんで。

A：何か用事ある？

*7 Aは広島に転入してしばらく経った頃で、すでに広島方言を理解していたが、わからないふりをして、ふざけていたとのことである。

B：いや、行けるって。

<方言>

行けん（記載なし）／行けない → 行ける

会話 22 実例

<状況>

友達同士、ゲームをしている。

<スクリプト>

A：これからどうするかなー。なにからやろうか。

B：まあ、別になんでもいいし適当にやろうか。

A：んじゃ、たちまちこれ作ろうか。

B：え？別にこれすぐ作らなくてもいいんじゃない？

A：え、まあそうやけど……。んじゃ、どうしよう……。

<方言>

たちまち（小：広島）／すぐに → とりあえず

4. 3. 2. 誤解・行為→叱責・文句など

会話 23 実例

<状況>

同学年の男子大学生。自宅で飲み会をして後片づけをしている。

<スクリプト>

A（神奈川）：この皿どうする？

B（栃木）：とりあえず冷やしといて。

A：了解。

B：なんで冷蔵庫に入れるの？

A：だってお皿冷やしといてって言ったじゃん。

B：ごめん、栃木では水に浸すことを冷やすって言うんだよ。

A：そうなんだ！知らなかった。

<方言>

冷やす（小：茨城、栃木、群馬）／冷たくする → 水に浸す

会話 24 実例

<状況>

授業が終わって帰ろうとしている男子大学生 2 人。冗談を言い合う仲。

<スクリプト>

A (広島)：そろそろいぬろうやー。

B (愛知)：ワン！

A：え？何？

B：犬ろうって言わなかったっけ？

A：え？言ったよ。

B：だから犬になったんだけど

A：あー「いぬろう」は「帰ろう」ってことだよ。

<方言>

いぬる (大：福井、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、島根、岡山、広島、香川、愛媛、高知、福岡、熊本、大分、宮崎) / 犬になる → 帰る

会話 25 実例

<状況>

男子大学生 2 人。

<スクリプト>

B (東京)：このゴミはどうする？

A (石川)：ほうっておいて。

B：わかった。

(しばらくして)

A：あれ、なんでゴミそのままなの？

B：ほうっておいてって言ったじゃん。

A：あれは捨てておいてって意味だよ。

B：そんな方言知らないよー。

<方言>

ほうる (大：大阪、香川、徳島) / 放置する、そのままにする → 捨てる

会話 26 実例

<状況>

大学院の研究室でゴミを処分しているところ。

<スクリプト>

B (北海道) : そこにある缶投げて。

A (愛知県) : Bに向かって缶を投げようとする。

B : おい、なにしてんだよ。

A : え? 投げてって言われたから。

B : 北海道ではゴミを捨てることを投げるって言うんだよ。

A : マジ?

<方言>

投げる (大: 北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島) / 投げる、投じる → 捨てる

5. 終わりに

以上、かくれた方言によって会話が思い通りに運ばなかった例を収集分類した。会話はいずれも学生の日常生活の1コマを描いたもので、誰にでも身近に起こりうる場面だった。報告された方言には、限定された地域でしか使われない「鍵をかう (= 鍵をかける)」「裏 (= 後ろ)」「うったて (= 書道の起筆)」「たちまち (= とりあえず)」などがあり、他の地域では通じないのもうなずける。しかし、かなり広域で使われる「えらい、こわい (= 疲れた)」「さら (= 新品)」「なおす (= しまう)」「われ (= お前)」なども含まれており、まだまだ全国で認知されているわけではないことが見てとれる。

では、通じなかった方言を理解するには、どうしたらよいのか。収集した会話では「～?」とオウム返しに尋ねたり、「～って何」と質問する方法が採られている。学生どうし、親しい間ではそれが効果的であろうが、相手が目上の人やあまり親しくない人であれば、自分の語彙が貧困であるために理解できないのではないかと恥じ入ったり、質問すること自体が失礼になるのではないかと遠慮したりするのではないか。このような場合の会話収集とその解決方法の追究は、今後の大きな課題である。

参考文献

- 上野智子・定延利之・佐藤和之・野田春美編, 2005, 『ケーススタディ日本語のバラエティ』, 初版第一刷, おうふう。
佐藤和之・米田正人編著, 1999, 『どうなる日本のことば——方言と共通語のゆくえ』, 大修館書店。
篠崎晃一, 2017, 『東京のきつねが大阪でたぬきにばける誤解されやすい方言小辞典』, 三省堂。
尚学図書編, 1989, 『日本方言大辞典』, 小学館。
小路幸哉・大崎善生ほか著, 2012, 『とっさの方言』, ポプラ社。
平山輝男ほか編集, 1992-1994, 『現代日本語方言大辞典』, 明治書院。